

1720年の事であつた。19Cの初め、砂糖栽培の急激な衰退により、*West Indians* も流れて来た。独立戦争後の *Philadelphia* の役人は主に英国人で占められたが、その為驚くべき発展を遂げ、合衆国への多くの移民を受け入れ *Catholic Irish* を手始めに、1848年には独逸から、更に伊太利から受けている、現在市内に *german town*, *Italian Market* 等一帯を成し、顕著な名残りを止めている。即ち *Philadelphia* の初期の移住者の広束と特徴は又、宗教に伴うそれでもあつたが、現在では、世界各国から広く集り、大体全人口の  $\frac{1}{2}$  が外国人である。更に多くの黒人達を忘れることはできない。勿論最初は奴隷としてやつてきたが、後に *Philadelphia* が及奴隷制の中心となつた為、漸次集まり、1950年センサスで30万を超え現在増加の一途を辿つている、或いは宗教的に相容れぬ理由で放浪の民となつたユダヤ人も安住の地を求めて集まり現在33万以上を数え、*Philadelphia* の父 *Penn* の描いた夢“宗教的にも人種的にも完全なる自由”は、今尚生きている。

こうして *Philadelphia* は *Boston* と共に米國植民地の中心として、米國と共に歩み、発展して来たといつても過言ではないだろう。1776年7月4日の独立宣言、1787年憲法発布、1789年オノ國會、1775~1800年、連邦政府首府となるなど、米國最大の都市として、他に追従を許さなかつた。エリー運河開通後 *New York* が抬頭する迄、*Boston* と共に *U. S. A.* の二大港として活躍し、背後の *Pennsylvania* 炭田や油田を控え紡績、毛、絹織物等繊維工業、或いは、船舶、車両、機械、航空機等主な重工業が発達している

又静かな文化都市としても重要である、週日未日し黒い肌の宿命をアピールした *Marian Anderson* や、常任指揮者 *Leopold Stokowski*, *Eugene Ormangy* を擁する *Philadelphia Orchestra*, 或いは音楽を志す人々のメッカ“*the Curtis Institute of Music*”もその名を世界に誇っている。

(オハ回生、在フィラデルフィア)

## 地理研究会創立とその一年

地理研究会會員

春もたけなわの四月、誰もがなんとなく野山へ出かけたくなつていた。しかし、ひとたび巡検を経験した地理学生にとつて、ありきたりのハイキング

はなんとしても物足りない感じがする。こんな時、フィールド・ワークの真似事でもいっしょにできる同志の仲間がいたらどんなにいい事だろう。……そんな考えが地理研発足の動機となり、意気投合した二、三年生の数人が中心となって準備がすすめられた。その結果、新入生歓迎席上のコマーシャルとなり、五月十一日にはオーラの会を開くに至った。

目的としては、フィールドにでる機会を多くする事の外、教室で得た知識を実際に使ってみる共同調査を行う事、地理学科内の縦のつながりを緊密にする場をもつ事、他校のサークルとタイアップすることにより、自らの向上をはかる事等が考えられた。そしてこの一年、危っかしい足どりであったが、会員数二十名前後を保持しながら活動を続けてきたのだった。三十五年度共同調査のテーマは「笹子峠をはさむ二村落」。八月末の初鹿野合宿は、大和村の青少年会館を宿舎として、ほぼ全会員が文字どおり寝食を共にした三泊四日であった。現地調査するにあたり自然、民俗、集落、経済の四班を編成した。残暑のきびしさを村のよろず屋でもとめた麦藁帽子で耐えながら朝から夕方まで歩きまわり、皆つかれて帰ってきたが誰も不愉快な顔をする者はいなかった。むしろ数々の新しい経験と自ら主人公となったエピソードを話すのに、消燈までの時間が短かすぎる思いだった。ここにそのうちの一つを紹介すると、自然班のM嬢、野良で働く一農夫に問うて曰く「この辺りの<sup>どじょう</sup>土壌は何ですか」答えて曰く「ここら辺りに<sup>どじょう</sup>ゃ泥鰌はいませんよ。」その外、ヒッチハイクをする時は手を挙げてニッコリほほえむ事、昼食時は農家の軒を借りると何か期待できる事等々貴重な(?)教訓も得られた。

九月に入り、試験が終る迄資料の整理期間とし、試験休みあけから 音楽展示のための活動が主になった。しかし会員だれもが一夜漬けの習慣をもっているらしく、展示ができ上つたのは撤音祭当日の朝十時、それでも名物笹子餅の販売が一役かつか地理研の展示はかなり好評だつたという事だ。

はじめの計画では共同調査の外に常時活動として読書会、研究会、他校サークルとのエクスカージョンなど計画していたが実際には東大地理研との千葉流山巡検と、「地形図の成り立と見方」を読みはじめた程度でまだまだ不活発。悩みは経験も知識も多い三、四年の会員が少いことである。読書会にしても、適切なチューターにめぐまれず停滞をかこっている。又この会を地理科以外にオープンとすべきか否か、などこの一年を土台としてこれからの在り方にはまだまだ検討を加える余地があると思われる。終りに、主旨に御質問の方の入会と、卒業生の皆様方の御助言を頂きたくおねがい申し上げます